



Title	前田富祺先生のご指導
Author(s)	米谷, 隆史
Citation	語文. 2026, 126, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

前田富祺先生のご指導

米 谷 隆 史

熊本に赴任して一〇年ほど過ぎた二〇一〇年頃、前田先生に勤務先での特別講義をお願いしたことがあった。午前中の授業だったので前泊を取っていただく旅程を組み、授業前日の午後熊本県の内陸部、菊池市に小さな調査旅行をするようになった。日本一薄いお菓子と称する「松風」と、当地の伝統的な「ゆべし」の伝承者への聞き取り、そしてもちろん購入が目的であった。いずれの店舗でも、先生が事前に電話で段取りを付けておられたこともあって、御当主直々の懇切なお話を伺うことができた。特に「ゆべし」は、東北によくある小さな角餅様でも、熊本県南部の中身をくりぬいた袖の中に餡を入れ込む形状でもなく、竹皮に米粉や味噌等と袖を混ぜた餡を角に引き伸ばし、そのまま包んで蒸して餅状にしたもので、食べてみると、濃い素材の味が折り重なる上に袖の酸味が際立つものであった。この御当主は絵が達者な方で、七福神が「ゆべし」製造の各行程を担当しているポスターが店内に貼られてあった。調査が終わって熊本市への帰途、前田先生が

笑みを浮かべて、「七福神をあんなに働かせてちゃ、商売としては

ね」とおっしゃったことが記憶に残っている。その後、焼酎の肴にするというものを含め、熊本県内のあちこちで「ゆべし」を食べたが、今のところ、かの折の「ゆべし」と同じ風格を感じるものには出会っていない。ただ、岡村真理子さんの御共著『お菓子の日本語文化史』を頂戴し、西鶴の『好色盛衰記』に「ゆべし」を肴に酒を嗜む場面があることをはじめて知った時は、彼の折に知っていたならば、との後悔を覚えたことであった。

私の卒業論文は室町期の古辞書『運歩色葉集』を対象とすごく短いものだったが、幸いに大阪大学大学院への進学を許された中から『合類節用集』を中心に据えることとなった。どの時代についてであれ、当時の研究室の方々は、諸先生方はもちろんのこと、大学院生の多くも、辞書が受容・編纂される文化圏について、かなり先の景観を見通しておられた。そのため、修士論文作成の段階で、編纂時の典拠の利用や改編意図をめぐる報告を行うと、その背景に対する洞察が物足りない、という旨の助言を受けるこ

とが多かった。そこに向けた勉強の大切さは自身でも痛いほど良くわかっていたので、そうした助言自体が身に堪えるということさはほどなかった。けれども、辞書そのものや辞書史を研究することの意義のようなものを、そのもの自体を問うかたちではなく、前田先生にお尋ねしたことは何度かあった。「時代の意識を含めた言語資料としては、」とか、「パズルの面白さもあるんですけどね、」とか、「私は最初は韻鏡の研究をしようと思っていて、」といった前置きがあつて、折々の調査の段階に即したお答えをいただいて安心したという記憶がある。熊本に赴任する少し前に、当時、先生が論文で言及なさっていた「物尽くし」や言語文化史研究の観点を踏まえ（たつもりで）、少し長い時間お考えを伺ったことがある。「発達史のような観点で節用集を位置づけてみたって良いんですよ、だけど」という流れでお話が始まったのだが、その後の内容をうまく思い出せないのは、どうしたことかと思う。

仙台におられる頃のこととは、佐藤喜代治先生のご指導に関すること以外は、前田先生からお話を伺うことはほとんどなかったが、先生よりも数年後に入学された東北大学の同窓の方から、大学院生の頃は、卒業論文のテーマ決定に苦慮する学部生に対して自身の用例カードを提供しつつアドバイスをするようなこともあったと伺ったことがある。また、松野陽一氏の「大道芸人論始末―東北大学教養部の日々」というエッセイ（笠間書院『書影手帖』しほしとてこそ）所収）に、当時、文科系研究棟の談話室で昼食をもにしていたメンバーとして「国語が文学の片野達郎氏と私、国

語学の前田富祺氏（三年後阪大へ転出。後任に佐藤武義氏が来た）」のようにお名前が挙げられている。その少し後には、「昼食後にコーヒー・クラブが組織されており、毎月五百円会費で豆を買い、粉に引いてネルの袋で淹れる本格的なもので」の記載もあつて、先生の研究室での授業を、少し濃い、時にブランデーを注いだコーヒーの香りとともに思い出す。なお、松野氏のエッセイの後半に記されている内容は、『国語語彙史研究』の「あとがき」に短く言及される状況と相応するところがあるのかもしれないが、これは、その場を知らない者の勝手な憶測に過ぎない。

阪神の震災後、前田先生の研究室は書架の書物や資料がまさに雪崩を打って床に堆く積もり、倒れ傾いたりとりどりの側を向いた大小の書架ともども、再び部屋に収めるのは容易ではなかった。その対策として、高さ・幅とも一八〇センチほどのスチール書架二台は、ドアを入ってすぐの位置に、ドアの壁に平行に背中合わせに配置されることになった。その二〇年程後、熊本地震で私の研究室もすっきり収まりがつかなくなり、今、スチール書架二台が先生の研究室と同じレイアウトで配置されている。

お姿を思い返していると、学生と廊下ですれ違う際に、ごくあっさりとはあつたが必ず声に出して挨拶をなさっておられた場面が幾度も浮かんだ。意図して先生に做っているのはこの点だけという自覚があるからだ、あのお声が遠くなってしまう。

（よねや・たかし 熊本県立大学教授）